

事業名称	北米・欧州ミュージアム日本美術専門家連携・交流事業		
実行委員会	ミュージアム日本美術専門家連携・交流事業実行委員会 2018		
中核館	独立行政法人国立文化財機構 東京国立博物館		
	住所	〒東京都台東区上野公園 13-9	
	TEL	03-3822-1111	FAX 03-3821-9680
	ホームページ	https://www.tnm.jp/	
構成団体	独立行政法人国立文化財機構京都国立博物館 独立行政法人国立文化財機構奈良国立博物館 独立行政法人国立文化財機構九州国立博物館 独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所 独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所 公益財団法人日本博物館協会		
事業開始時点の課題分析	<p>北米・欧州のミュージアムには、多数の日本美術コレクションが存在する。歴史的には、江戸時代の南蛮貿易、明治維新期の廃仏毀釈、戦前の古美術商等による売買、そして戦後のアメリカ将校らによる売買等いくつかの時期に集中的に輸出あるいは流出している。海外に所在するこれらの日本の古美術品は、日本文化を紹介する文化大使ともいふべき役割を担っているが、その中には、気候風土の違いなどから損傷が進み、公開に支障をきたしているものも少なくない。このため、文化庁では 1991 年に「在外日本古美術品保存修復協力事業」を開始し、2001 年度からは東京文化財研究所を事業主体に推進しているが、未だ個人や小規模館のコレクションは手付かずの状態である。また、これらを適切な環境で管理・保存するための指導的立場にある日本美術の専門家が高齢化しており、海外における文化財の修理に留まらない日本美術の専門家の養成及びそのネットワークの形成が急務となっている。</p>		
事業目的	<p>本事業は、北米・欧州を中心とした海外における日本美術コレクションの適切な管理・研究・活用を行うための礎となる若手を中心とした日本美術の専門家の養成及びそのネットワーク形成を目的としている。</p> <p>比較的日本美術のコレクションが充実している北米・欧州においても、それを研究する専門家が不足しており、管理・研究・活用の体制が十分でないのが実情である。また、日本美術の専門家が在籍するミュージアムにおいても、その高齢化が問題となっており、次世代へその経験や知識を継承していくことは急務である。そのため、世界規模での日本美術専門家のネットワークを形成することにより、専門家が不在の小さなミュージアム等に所在する日本美術コレクションの管理・研究・活用のフォローアップをすると同時に、単独館では実現が困難な日本美術研究の若手専門家を養成できる体制を長期的な視野で形成していく。</p> <p>実施に当たっては、引き続き東京国立博物館を中核として国内の主要博物館等と連携し、日本美術に関するワークショップや国際シンポジウム等を開催し、日本文化の海外発信、ひいては国際文化交流の推進に資することを旨とする。</p>		

<p>事業概要</p>	<p>「日本美術専門家会議」における討論を踏まえ、2019年 ICOM 京都大会に向け、日本美術専門家の組織化及び国内外の日本美術専門家のネットワークを推進するとともに、海外における日本美術コレクションの管理・研究・活用方法について引き続き検討していく。</p> <p>具体的には、「国際シンポジウム」「日本美術取扱ワークショップ」を実施する。まず、日本国内で国際シンポジウムを開催し、海外における日本美術コレクションの重要性の認知を高めると同時に、研究の活性化を促す。さらに、日本美術取り扱いワークショップを開催し、日本美術に携わる可能性のある若手を中心とした海外のミュージアムの担当者の日本美術品に対する知識と経験を高めることにより、海外における日本美術品の管理・研究・活用の活性化を図る。加えて、海外における日本美術品の現地調査等を通じ、本事業の目的とする人材育成や国際的な日本美術のネットワーク構築を図る。</p> <p>なお、調査や事業の結果は報告書及びウェブサイトで積極的に公開していく。</p>
<p>実施項目 ・ 実施体系</p>	<p>(1) 地域文化の発信の核となる美術館・歴史博物館</p> <p><input type="checkbox"/>ア 美術館・歴史博物館の情報発信、相互連携</p> <p><input type="checkbox"/>イ ユニークベニユアの促進</p> <p><input checked="" type="checkbox"/>ウ 地域のグローバル化拠点としての美術館・歴史博物館</p> <p><input type="checkbox"/>エ 地域に存する文化財を活用した地域共働の創造活動や地域の魅力の発掘・発信</p> <p>(2) あらゆる者が参加できるプログラム及び学校教育や地域の文化施設等との連携によるアウトリーチ活動</p> <p><input type="checkbox"/>ア 小・中・高等学校と連携した地域文化の担い手の育成</p> <p><input type="checkbox"/>イ 大学等と連携した国内外で活躍する文化人材育成プログラムの開発</p> <p><input type="checkbox"/>ウ 社会人ほか多様な対象者のための学習講座の実施</p> <p><input type="checkbox"/>エ 障がい者の芸術活動支援・鑑賞活動支援等の事業</p> <p>(3) 新たな機能を創造する美術館・歴史博物館</p> <p><input type="checkbox"/>ア 観光・まちづくり・国際交流・福祉・教育・産業等他分野との連携・融合による活動</p> <p><input type="checkbox"/>イ 文化財の新たな保存管理・活用の手法の開発</p>
<p>施後の 成果・効果等</p>	<p>本事業は、北米・欧州のミュージムにおける日本美術専門家の養成及び、海外のミュージアム等が所蔵する日本美術作品を適切な環境で管理・保存する観点から、国内外における日本美術の専門家の養成及びそのネットワークの形成を目的としたものであり、本事業の継続的な実施により、日本美術専門家の国内外における連携・協力の推進を図ることができた。</p> <p>平成30年度は、引き続き、日本美術専門家会議、国際シンポジウム、日本美術の取り扱いに関するワークショップを実施した。</p> <p>国際シンポジウム・日本美術専門家会議を通して、日本および海外で日本美術を担当する学芸員が直面している問題を共有し、情報交換および討論を行った。</p> <p>日本美術に関するワークショップは、東京国立博物館を中心に着物と陶磁器の取扱い講座や折り紙を使った着物の構造を理解するワークショップを実施するとともに、金沢の美術館、加賀友禅や大樋焼など伝統工芸に関する工房等の視察を行い、日本美術の専門家だけでなく、日本美術も取り扱っている中国や韓国美術を専門とした海外の学芸員</p>

にも日本美術の理解を深めてもらうことができた。参加者からは、折り紙を使ったワークショップなどのハンズオン体験、染織・陶磁に分野を絞ったプログラム内容を評価する声が多く上がった。

本事業の詳細は、報告書及びウェブサイトにて確認することができる。

(<http://www.japan-art.org/>) 過去のシンポジウム等の記録の共有により、今後に向けた連携協力の深化が期待できる。

## 【事業実績】

### ①日本美術専門家会議



日時：平成 31 年 1 月 19 日（土）

会場：東京国立博物館 平成館第一会議室

出席者：33 名（海外 10 名、国内 3 名、国立文化財機構 20 名）

#### （北米）

アン・ニシムラ・モース	ボストン美術館
モニカ・ビンチク	メトロポリタン美術館
アンドレアス・マークス	ミネアポリス美術館
ローラ・アレン	サンフランシスコ・アジア美術館
ジャオジン・ウー	シアトル美術館

#### （欧州）

ルパート・フォークナー	ヴィクトリア&アルバート博物館
ウィブケ・シュラーペ	ハンブルク美術工芸博物館
アイヌーラ・ユスポワ	プーシキン美術館
メンノ・フィツキ	アムステルダム国立美術館

#### （国内）

樋口 智之	仙台市博物館
塚本 鷹充	東京大学東洋文化研究所
奥 健夫	文化庁

#### （国立文化財機構）

浅見 龍介	東京国立博物館
鬼頭 智美	東京国立博物館
救仁郷 秀明	東京国立博物館
今井 敦	東京国立博物館
三田 覚之	東京国立博物館

朝賀 浩	京都国立博物館
井並 林太郎	京都国立博物館
マリサ・リンネ	京都国立博物館
内藤 栄	奈良国立博物館
翁 みほり	奈良国立博物館
望月 規史	九州国立博物館
白井 克也	九州国立博物館
江村 知子	東京文化財研究所
米沢 玲	東京文化財研究所
井上 洋一	東京国立博物館
富田 淳	東京国立博物館
田沢 裕賀	東京国立博物館
栗原 祐司	京都国立博物館
島谷 弘幸	九州国立博物館
山梨 絵美子	東京文化財研究所

内容：北米・欧州・日本の日本美術学芸員が業務上で直面する問題についての討論および情報交換

#### <参加者からの声>

- ・インバウンド対応により多言語化を推し進めているなかで、そもそも題箋がどのような情報を提供すべきなのかということについて欧米の事例や考え方を知ることができ、大変有意義であった。
- ・シンポジウムの議論を深める形で古美術と現代アートを組み合わせた展示などについて、欧米においての試みなどを聞くことができてよかった。

## ②国際シンポジウム



テーマ：「世界の中の日本美術—オリエンタリズム・オクシデンタリズムを超えた日本理解」

日時：平成 31 年 1 月 18 日（金）

会場：東京国立博物館 平成館大講堂

来場者数：250 名

内容：発表およびパネルディスカッション

発表 1 アン・ニシムラ・モース ポストン美術館 日本美術課長

「オリエンタリズム・オクシデンタリズム・グローバリズム:ポストン美術館における日本美術」

発表 2 矢野明子 大英博物館 アジア部日本セクション 三菱商事キュレーター(日本コレクション)

「独特かつ繋がる日本文化—大英博物館における展示を事例に」

発表3 ヴィブケ・シュラーペ ハンブルク工芸美術館 東アジア部門主任

「異文化が語り合う場所—ハンブルク工芸美術館東アジア展示室」

発表4 アイヌーラ・ユスポワ 国立プーシキン美術館 東洋絵画学芸員

「日本美術を見せる:ロシアからのまなざし—東と西の狭間で」

発表5 今井 敦 東京国立博物館 学芸研究部調査研究課長

「日本陶磁の特質—中国陶磁と比較して」

パネルディスカッション

モデレーター 浅見龍介 東京国立博物館 学芸企画部企画課長

#### <参加者からの声>

- ・発表やパネルディスカッション等を通し、オリンピックパラリンピックに向けて、日本が外国人にどのように見られてきたか、今、見られているか。どういふことを期待されているのか。逆に、日本側がどのように見せようとしているのか。そういった問題を考える良いきっかけとなった。
- ・研究者同士で視点を共有するだけでなく、日本美術をどのように博物館・美術館が提示していくべきか、という課題について一般参加者とも情報や考え方を共有できる機会となった。

#### ③日本美術取り扱いワークショップ





日時：平成 31 年 1 月 15 日（月）～17 日（木）

会場：東京国立博物館、東京文化財研究所

石川県立伝統産業工芸館、金沢 21 世紀美術館、石川県立美術館、石川県文化財保存修復工房  
兼六園、金沢能楽美術館

大樋美術館、加賀友禅・鶴見染織工芸、長町武家屋敷跡

参加者：22 名

（北米）

ローラ・アレン

サンフランシスコ・アジア美術館

モニカ・ビンチク

メトロポリタン美術館

ワイ・イー・チョン

ロードアイランドスクールオブデザイン附属美術館

アンニエッタ・ガスパース

シカゴ美術館

ハタヤマ・マミ

シカゴ美術館

マヤ・ハラ

サンフランシスコ・アジア美術館

アンドレアス・マークス

ミネアポリス美術館

アン・ニシムラ・モース

ボストン美術館

ナカムラ・フユビ

UBC 人類学博物館

エリザベス・サルーキ

クリーブランド美術館

サラ・トンプソン

ボストン美術館

ローラ・ヴィーゴ

モントリオール美術館

ジャオチン・ウー

シアトル美術館

ヤオ・ウー

スミス大学附属美術館

(欧州)

レオノーラ・ベアードスミス	大英博物館
オルガ チェルノワ	ロシア国立東洋美術館
ルパート・フォークナー	ヴィクトリア&アルバート博物館
メンノ・フィツキ	アムステルダム国立美術館
ウィブケ・シュラーペ	ハンブルク美術工芸博物館
アンナ・サヴェルエヴァ	エルミタージュ美術館
アイヌーラ・ユスーポワ	プーシキン美術館
ヤマダ・マサミ	ヴィクトリア&アルバート博物館

<参加者からの声>

- ・着物の構造に関するワークショップや文化財の取り扱いについての講座を行った後に、工房などの制作現場やそれが用いられている様子を見ることができ、プログラムとしてよく練られていた。
- ・金沢には来られてもなかなか個人でのアレンジが難しい場所などを訪問することができ有意義であった。

すべてのプログラムを終えた後に開催された意見交換会では、年々プログラムが充実していることが参加者より高い評価を受けており、日本美術の取り扱いについてキュレーターだけでなく、ハンドラーやデザイナーなど日本美術の展示にかかわる幅広い専門家に対しての研修について高いニーズがあることをうかがうことができた。

また、この事業の結果として生まれたネットワークにより、海外における日本美術展の進行がスムーズとなり、また海外の日本美術専門家同士の交流も盛んになっていること、それらによって新たな日本美術の展覧会の企画が立ち上がってきていることに多くの研究者から謝意が述べられた。